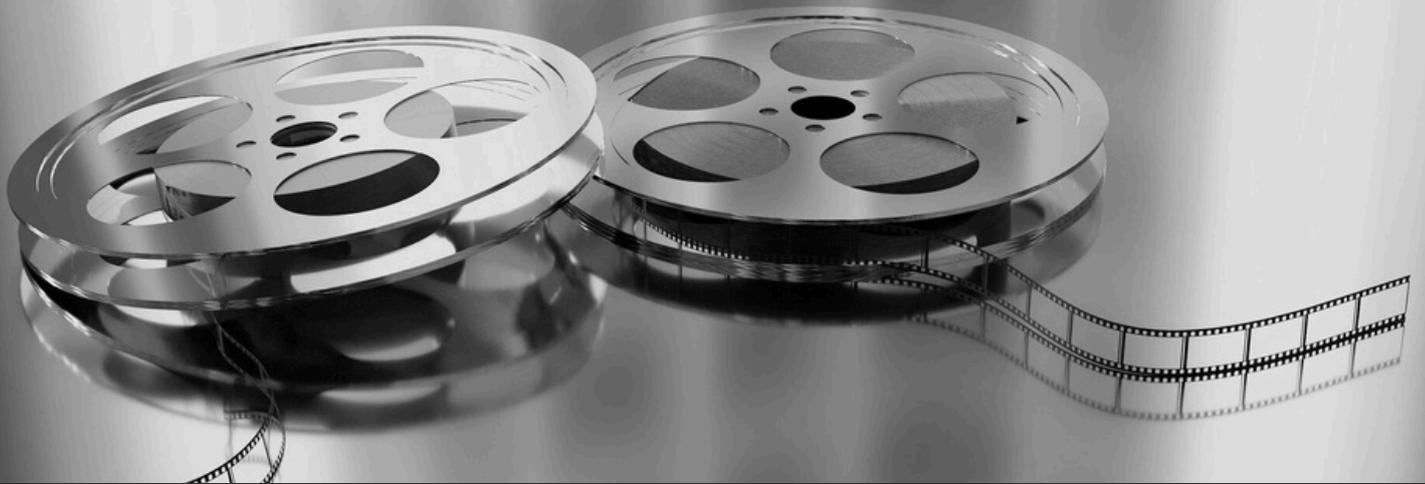


シネマ通信

第14号 (2024年9月16日)



パリの小さなオーケストラ

第14回鑑賞作品

監督・脚本：マリー＝カステューユ・マンション＝シャル
「奇跡の教室 受け継ぐ者たちへ」「パリの家族たち」他
出演：ザイア（ウーヤラ・アマムラ）セルジュ・チュリヒダ
ック（ニエル・アレストリュプ）他、現役音楽家が多数出演

移民の子である少女が
パリの名門音楽院に編入
指揮者を目指す
少女の挑戦が始まる

移民の多いパリ近郊の音楽院で学んできたザイアは、妹と共にパリ市内の名門音楽院に最終学年で編入が認められる。指揮者になりたいという夢を抱くが、世界中で女性指揮者はわずか6%という狭き道。しかも、アルジェリア系移民の子であるザイアには、いわれのない差別が待っていた。しかし、特別授業で元ベルリン・フィル首席指揮者であるセルジュ・チュリヒダックの目にとまり、指導を受けることになる。時に厳しく、時に温かいセルジュの指導の下に、人間的にも大きく成長を遂げたザイアは…
貧富の差が無く、誰でも音楽を楽しむことを願い「ディヴェルティメント・オーケストラ」を立ち上げたザイア・ジウアニの、実話に基づく心温まる物語です。



About Them

楽団名になっているディヴェルティメントは、18世紀中頃に現れた器楽組曲。人を楽しませるという意味のイタリア語が語源で、明るく軽妙な音楽を指します。

1998年にザイア・ジウアニが音楽院の学生や教師、そして地元の友人たちと共に垣根を越えて設立したこのオーケストラは、現在、団員約70名。交響曲に加えてワールドミュージック、伝統音楽、ポピュラー音楽など幅広いレパートリーで、何と、年間約40回のコンサートを開催しているとのこと。彼らの音楽が、パリの人々に広く愛されている証しといえるでしょう。

本作の監督マリー＝カステュー・マンション＝シャルは、「ヘブン・ウィル・ウェイト」ではイスラム過激派に洗脳された無垢な少女たちを、「奇跡の教室 受け継ぐ者たちへ」では、問題児たちに希望を与える女性教師を、ていねいに描いてきた寡作な映像作家。今回は、名曲の調べに乗せて、若き音楽家の挑戦を綴ります。



About Something

「ボレロ」と聞けば、誰でもあのメロディーが浮かんできますね。でも、作曲したラヴェルについては、何も知らない人も多いのではないのでしょうか？

『ボレロ 永遠の旋律』は、謎多き作曲家ラヴェルの生涯を描いたフランス映画（監督：アンヌ・フォンテーヌ、出演：ラファエル・ペルソナ）です。まず観客を引きつけるのが、音楽映画らしからぬ冒頭のシーン。殺風景でやかましい工場の中を、アメリカ公演を成功させ世界的名声を確立したラヴェルが、イダ（当時の著名な舞踏家）を伴い、まるで散歩でもするように歩いていく。そして、イダに「新曲のリズムは、この工場の機械音を基調にしている」と語ります。不審げにラヴェルを見るイダ。ラヴェルは、イダからオペラ座で踊るための新曲を依頼されていたのです。

しかし、構想はほぼ固まっているが、なかなか曲として完成できない苦悩の日々。ラヴェルの心の中を覗くように、幼い日の母との思い出、永遠のミューズ：ミシアとの、惹かれ合いながら先へと進めないもどかしい逢瀬、心優しい家政婦との安らぎのひととき・・・などのシーンが重なります。そして、1928年10月15日、ついに「ボレロ」が完成。11月22日、パリ・オペラ座でイダのバレエ団による世界初演の日を迎えます。ラヴェルが曲に込めたイメージとは全く異なる官能的な群舞は、観客に熱狂の渦を巻き起こし、「ボレロ」は、世界中で15分に1回は演奏されるという大ヒット曲となっていく。しかしその圧倒的な成功は、作曲家に幸せをもたらすものではなかった・・・

幼少時から病弱だったラヴェルは、自動車事故の後遺症もあったのか、次第に体調を崩し病名も分からぬまま62歳で生涯を閉じる。晩年は失語症のような症状に苦しみ、作曲はもとより手紙を書くこともおぼつかなくなり、一日のほとんどをパリ近郊の館で庭を眺めながら過ごしたという。

同じパリを舞台に、才能の力で望むもの全てを手に入れたピカソと、才能に全てを捧げて抜け殻のようになったラヴェル。神に選ばれし者たちも、その人生はさまざまなようです。

20世紀初頭のパリに住みたい!!どんな分野でもいいから自分が生まれてきた証しを残したい!!などと、凡人の妄想は程々に。まずは、特別な才能は無くとも日々を心豊かに過ごせるよう、人類にARTを与えてくれた神様に、深く感謝することにいたしましょう。